

心をつなぎ 伝えたい

福島県 福島大学附属中学校 1年

橋本 花帆 (はしもと かほ)

私は外国人だった。ある日突然、外国人になった。そして初めて、痛みを知った。差別されることの悲しみを知った。

小学五年生の秋、木枯らしが吹く寒い日だった。その日は、放課後のスイミングスクールがあり、駐車場に停めた車から降りたところだった。目の前をゆっくりに走る車の窓から、白人の若者達が何かさげんでいる。

「・・・Go back・・・。」

聞き取れた言葉はそれだけ。ゴージャック、帰れ？少し不安になり母を見上げた。

「見てはだめ。走ろう。」

母は私の手を引き、急いで建物へ向かう。顔が青ざめていた。私はあの若者達から嫌われているらしい、そう思ったらカッと身体が熱くなった。

アメリカに来て初めての出来事だった。小学三年生の時、父の転勤でシカゴへやってきて、たくさんの方が私を助けてくれた。髪の色が違う。肌の色も、目の色も、言葉も生まれた国も違う。でもそんな事は関係なく、皆優しく親切で、困っている時には、支え助けてくれた。幼かったからなのか、気付かなかったのか、私には全然見えていなかった。知ろうともしなかった現実があったのだ。

「シカゴの南はブラックの犯罪地区だから近付いてはいけないよ。」

と現地の人に言われた時は、ここは北だから安心だな、という認識しかなかった。区別も差別も、何も考えられなかった。

ところが、大統領選挙が近付くと、少しずつ周りの雰囲気が変わってきた。それが五年生の秋。あの日のスイミングスクールの帰り、母が言った。

「白人に何か言われても、気付かないふりをして通りすぎなさい。若者は熱くなってるだけだから。大丈夫、少しのがまん。」

運転しながら話す母の声は、緊張していた。そんな事を言われたのは、初めてだ。けれどそれは、すぐに現実となる。

買い物へ行くと、私達を見てムスツとする人、笑って通り過ぎる人もいた。何かを言われた時、ある言葉が私につき刺さった。

「Immigrant！」

イミグラント、移民と呼ばれる人々の事だ。難しい政治の事は分からない。なぜ移民が悪い人のように言われるのか、なぜ私もそう呼ばれるのか、分からないけれど知りたいと思った。

「今の一部の白人にとっては、メキシカンもアジア人もブラックも、ここから出て行ってほしい存在だから。」

母はとても悲しそうだった。

「今週もダウントウンで差別反対のデモがある。しばらく街中には近付かない方がいい。」

父はニュースを見ながら怖い顔で言った。

私は大人達の声に耳を傾けた。友人にも話を聴いた。大統領がメキシコ国境に壁を作ろうとしている事、古き良き時代を取り戻すため移民を排除しようとしている事、自国第一主義という考えが広がっている事、そういう話を初めて聴いた。初めて知った。

心に小さなトゲが刺さった。待ち針が刺さったような、チクツとした痛み。その待ち針は増えていって、私の心は針山のようになってしまった。けれど、汚い言葉や怖い言葉を針のように投げつけられてチクツと刺さったこの心で、差別される側の痛みを知る事が出来たのだ。人は同じ痛みを知る事で、心から相手を理解出来る事がある。

日本へ戻り、中学生になった私は、見えなかった世界にようやく気が付いた。安い賃金でやとわれるアジア人労働者、日本の技術研修に来ていたはずが、知らずにやらされていた原発での除染作業、朝鮮学校前でのヘイトスピーチ。外国人の人権問題は、新聞やテレビ、ネットの世界でも取り上げられていた。そして私は、日本で「外国人」と呼ばれる人々の差別や痛みを知ったのだ。

差別はなぜ生まれるのか。なぜ人種や国で区別され、ひどい扱いを受けることがあるのか。どうしたら差別を無くす事が出来るのか。経験から分かった事は、知る事だ。大切なのは、知る事なのだ。相手を知り、痛みを知る事で人種や国での区別も、そこから生じる差別もなくなる。知る事で、知り合う事で、他人は友人になる。外国人は、大切な一人の友人になる。差別を生んでしまうなら、「外国人」なんて言葉は必要ない。国という壁を越えて、壁を壊して、同じ人間としてつながっていけばいい。友人としてつながれたら最高だ。多くの人が願う事で、多くの人が望む事で、多くの人が声を上げる事で、差別の壁は崩れていくはずだ。

だから私は発信する。声を挙げて、自分の痛みを分かち合う。恐れずに発信すれば、きっと受け取ってくれる人がいる。人種や国を越えてつながる温かさを、平等がもたらす幸せと平和を日本中に伝えたい。そういう優しさと温かさを世界中に伝染させたい。